

『八月のスケートリンク』

新垣悠紀穂(あらがき・ゆきほ)

8132文字

あらすじ

子ども病院の看護師・新垣は、入院中のスケート好き小学生・加奈や子どもたちのために、院内に「真夏のスケートリンク」を作って励ますことを計画。若手医師や加奈自身の反対に遭うが、リンクは無事完成。加奈は前向きに手術を受けることを誓う。医師たちも、「本当に大切な事とは何か」を思い出す。

【八月のスケートリンク】

この年の夏、八月はうだるような日々が続いていた。重い病を抱えた子どもたちは、季節感を感じない病棟の中で、いつ終わるともない日々を送っている。

「金沢先生、日枝加奈(ひえだ・かな)ちゃんの移植の日程、決まりましたね。元気に退院できると良いなあ」

今年で二八歳になる中堅看護師の新垣凜奈(あらがき・りな)が、少し不安げな表情で言った。

那古野(なごの)市立子ども総合病院の小児病棟には、乳幼児から小学生まで数十人が、ここで病と向き合いつつ、日々の生活を送っている。

「彼女はまだ小学五年生だが、姉と HLA(ヒト白血球抗原)が一致して骨髄を移植できるのがあるがたいな。ただ、入院前までよく笑う、元気な明るい子だったというが、今はその面影すらない。いつも、暗く沈んでいるのが気になる」

小児科長の金沢が、カルテを見ながらつぶやいた。加奈は、一年生の時に始めたスケートが大好きな小学生だ。那古野市内の大洲(おおず)観音商店街にある市民スケートリンクに毎日通い、オリンピック選手からも指導を受けるほどスケートに熱中していた。

だが、六月初旬のある日、練習中にリンクの上で、突然倒れた。

そのまま病院に搬送されて、緊急入院。診断の結果、病名は、「急性白血病」だった。これまでのところ、容体は安定しているが、学校に行けず、スケートもできないためか、落ち込んでいて、元気がない。

「で、いいアイデアがあるんです！」

新垣が元気よく切り出すと、金沢は苦笑した。

「来たね。君は、そういうの好きだからねえ。何だね？」

「ちょっと薄暗い雰囲気、この小児病棟を元気で明るくするっておきのアイデアです」

この病院には、難病を患い、長期入院をしている子どもたちも少なくない。そのためか、雰囲気は暗く沈みがちである。

「ここの医師たちは、みな真面目で、診察中もニコリとも笑わない。病気が心配なのは分かるが、医師まで深刻な顔で診察していて、笑いが不謹慎だとさえ思われている。それが子どもたちだけでなく、親御さんにも伝わっている」

病を得た子どもたちは、家族ぐるみでの闘病生活となるため、子どもだけでなく、家族の存在が大きく影響する。

「深刻な親御さんを見ていると、子どもたちも不安になりますから」

「そうだ。だから、私の方針は知ってるだろう？」

「ええ。『笑う門には、病去る』ですね」

「お、分かって来たじゃないか」

金沢は、勤務医を務めながらも人間の「笑い」という感情が、病気にどのような影響を及ぼすかと言うことを研究していて、病気と向き合う子どもたちにも、笑顔を取り戻すような治療を進めていた。

新垣はニヤリとした。

「スケートが大好きな加奈ちゃんはもちろん、普段思い切り遊べない子どもたちを励ますために、小児病棟にスケートリンクを作っちゃいましょう！」

さすがの金沢も、椅子からずり落ちそうになった。傾いた眼鏡をグイッと人差し指で押し上げながら、椅子ごと振り向いた。

「お、おい。いくら自由にやっているとんでも、真夏に、しかも、病院にスケートリンクはないだろう？ 第一、場所がない。無理だ」

金沢は、あきれたと言った表情で、首を振った。だが、新垣は自信満々だった。

「ところが！ あるんですよ！ しかも、身近なところに！」

そう言って新垣が胸を張ると、金沢は、恐る恐る推測してみた。

「ひょっとして、あそこか？」

「そうです！ あの、受付前の広場！」

「あれは、広場じゃないだろう……」

一階にある小児病棟の受付は、子どもたちの元気が出るようにと、壁面がガラス張りで、外から内部が見通せる構造である。受付台があって、その右側が診療室の入り口になっている。だが、不自然なことに、その左側には、五〇㎡程度の何もない殺風景な空間が広がっている。

実は、そこには遊具が設置される予定だった。ところが、その直前に「病院に遊具は必要ない」という院内の「偉い人」の天の声によって、計画倒れになっていた。

「ね、先生。あそこ、殺風景で病院の顔としてふさわしくないんですよ。だから、狭いけど、子どもたちのためにピカピカにして、滑って、転んで、笑い合える場所にしたいんです！」

病院にスケートリンクとは、上端としか思えないが、新垣の真剣な表情と訴えに、金沢は少し動かされた。だが、依然として疑問は残る。

「じゃあ、氷はどうするんだ？ 病院には、氷を作る機械もないし、それを維持するほどのクーラーもないぞ？」

難しい表情を浮かべる金沢とは対象に、新垣は逆にニンマリとほほ笑んだ。

「えへへ。そう来ると思った。私には、秘密兵器があるんです！」

「秘密兵器？ はは、相変わらず子どもみたいなやつだ」

「そうです。だから、子どもたちの気持ちが、分かるんですよ」

新垣は、アハハと笑った。「天真爛漫」とか「天然自然」という言葉が服を着ているような看護師だった。

「まあ、そういうことならお前に任せよう。お偉いさん方は、私が何とかしよう。人手が必要なら、私が号令を掛ける」

「わあ、ありがとうございます！ よっ、先生、男前っ！」

新垣は、頭を下げて診察室を飛び出していった。

「まったく、掴みどころのないヤツだ」

金沢は苦笑した。

その新垣の姿は、日枝加奈の病室にあった。

「あのねえ、加奈ちゃん。良い話があるのよ」

加奈はベッドの上で座って本を読んでいた。スケートの本だった。

検査ばかりの毎日と、学校に行けないもどかしさ、それに大好きなスケートを取り上げられたストレス、そして移植への不安から、機嫌が悪い日が続いていた。病室には、暗い雰囲気立ち込めている。

「……今のわたしに、いい話なんてないよ」

そう言って、加奈は顔をそむけた。

「そうかなあ。だって加奈ちゃん、もう一度リンクに立ちたいって言ってたでしょ」

新垣がそう言うと、加奈は眼に涙を浮かべながら、不安と不満を吐き出すように言った。

「わたし、もう死んじゃうんだ……。白血病って言うんでしょ？ 血液のガンだって、ネットに書いてあったよ。死んじゃうのに、練習なんて、したって意味ないもん！」

それきり、枕を取り出して顔をうずめ、シクシクと泣き始めた。

新垣は、加奈の肩にそっと触れた。

「あのね、加奈ちゃん。今はね、ちゃんと治療を受ければ、白血病は治る病気なのよ。ここの病棟に来た子たちも、みんな元気になって帰って行ったわ。一番、よくないのはね、治すぞって気持ちが無くなって、笑顔が無くなってしまうことなの」

加奈は、それを黙って聞いていた。肩が、小刻みに震えている。

「明日ね、午前の外来が終わったら、先生たちと私たち、みんなで受付前にスケートリンクを作るのよ。みんなでお掃除をして、床をピカピカにして、それで……」

「スケート、リンクを、受付に？」

加奈が、少しだけ顔を上げた。枕が、涙と鼻水でぐしょ濡れだった。

「うん、楽しそうでしょ。よっくんも、ルナちゃんも、みんな来るわよ」

「え？ よっくんと、ルナちゃんが」

新垣は、加奈よりも長期間入院している同い年の少年と少女の名前を例に出した。

それを聞いた加奈は、黙り込んで、何かを少し考えている様子だった。

「興味がないのなら、いいのよ。加奈ちゃんは、ゆーっくり、お休みしてくださいね。じゃあ」

「あ、ちょっと待つ……。ううん、何でもない」

新垣は、加奈の声を背中越しに聞いていた。その言葉の続きは、大体想像できた。

「ごめん、あとでまた来るわね」

そう言って、わざと足早に加奈の病室をあとにした。

翌日。午前の外来が終わって、小児病棟は家族だけが来室できる時間帯になった。

この日は、受付を完全に締め切って、関係者以外は入れないようになっていた。

小児科の医師や看護師、それに医療事務員ら一〇人ほどが、「少し変わった格好」をして、受付前に集まっていた。

病院の床は、綺麗に見えて、意外に汚れが蓄積している。車椅子が通った跡や、点滴が落ちたシミ。通常の清掃活動ではなかなか落ちない汚れを落とし、「八月のスケートリンク」の下地作りを行うのが、この日の目標だった。

「なんでオレたちが、こんな格好しなきゃならないんだよ……」

眼鏡を掛けた若い医師が不満を口にしていた。宇宙服のような白のつなぎに、ランドセルの様な特殊な装置を背負っている。

右手には、背中から伸びたノズルを手にしていて。誰の手にもフィットし、狭い場所にも自在に入るフレキシブルタイプで、先端から洗浄液を噴出し、汚れを浮き立たせ、なおかつ吸い取る構造となっていた。

「先生方、皆さん！ 今日はお集まりいただき、ありがとうございます。今から、子どもたちのためにスケートリンクを作りたいと思います。ささやかだけど、子どもたちが、楽しく滑って転んで、笑顔になれる、素敵なリンクをたったの二時間で作ります！」

発起人の新垣が、深々と頭を下げた。ブツブツ文句を言っていた眼鏡の医師が、それに対して不満を口にした。

「新垣看護師。金沢先生の命で参加したが、このような清掃活動は本来、我々の仕事ではない。清掃業者の仕事ではないのか？ 我々がやる必要性が、全く感じられない」

そう言って、肩をすくめて、露骨に不機嫌な顔をした。だが、新垣は、意に介さんとばかりに、ニッコリとほほ笑んだ。

「芹沢先生、笑うと活性化されるあるモノって、ご存知ですよね！」

医療関係者でもない人間でも知っているだろうと、居合わせた人たちはみな思った。

「新垣君、それは仮にも医師である私に対して、失礼じゃないか？ 何が言いたい」

芹沢と呼ばれた医師は、仏頂面をさらに陰しくして腕組みをした。新垣は、それにも臆さなかった。

「子どもたちは、いつも病と向き合いながらも、私たちに精一杯の笑顔を見せてくれて

います。痛いのに、苦しいのに、家に帰りたいのに。だから、私たちが子どもたちのために、少しでも頑張ってる姿を見せたいんです。笑顔を、プレゼントしたいんです！」

新垣の勢いのある言葉を、金沢がつないだ。

「芹沢、子どもたちに『笑う門には、病去る』と言いながら診察している我々が、子どもたちの病状が良くない時、治療がうまくいかない時、どんな顔をしているか、鏡で見たことがあるか？」

「それは……」

芹沢は、言葉に詰まって、目を伏せた。

「だろ？ 『医者の不養生』、『灯台下暗し』という言葉、知らぬ訳なかるう。子どもたちを笑顔にするためには、まずオレたちが笑顔になるんだ。ほら、芦田。お前も渋い顔をしてないで、笑え！」

金沢は、顔面の全筋肉を総動員して、満点の笑顔を作った。

上司に命令された芦田は、顔を引きつらせながらも無理やり笑顔を作った。

「それ、みんなも笑え！」

居合わせた看護師や職員たちは、最初は恥ずかしがりながらも、クスクスと笑い始め、次第に大爆笑に変わった。

「久しぶりね、こんなに大笑いするの」

「金沢先生のおんな笑顔、始めてみたわ」

冷めていた雰囲気は、少しずつ暖まっていた。

新垣が、ズイと前に出た。

「今日のコンセプトは、『ダストバスターズ』です。ホコリや汚れを、この武器で、退治しちゃいましょう！」

新垣がそう言うと、金沢が手本を見せるかの如く、作業に取り掛かった。事前の打ち合わせ通りである。

金沢は、シミや黒ずみを見つけては、ノズルから洗浄液を噴射し、綺麗にして行った。

「うむむ、これはお化け退治みたいで面白いな。皆も、やってみろよ」

科長の金沢にそう言われると、医師や看護師たちは、半信半疑ながらも手にしたノズルを操り始めた。

「確かに、これは面白いかもしれない。第一、我々の病棟が綺麗になって行くのは気分が良い」

否応なく始めた芹沢や他の医師たちも、次第に映画の主人公になったような気分を味わい始めていた。楽しみながら作業をすることで会話が生まれ、そこから、自然に笑顔と、笑い声が生まれていった。

小一時間もすると、ホコリは消滅、シミや黒ずみはその形跡すら残らない状態となった。

「わあ。先生方も、やればできるじゃないですか。それに、作り笑いじゃない素敵な、自然の笑顔が戻ってますよ！」

医師たちは、お互いの顔を見合わせた。普段は、緊張した表情が自然とほぐれ、子どもの様な笑顔が戻っていた。

「さて、ここからが問題だ。これを、どうやってスケートリンクにするんだ？」

新垣は、金沢との事前打ち合わせでも、「八月にスケートリンクを作る方法」までは明らかにしていなかった。

「じゃーん！ これを使います」

新垣が取り出したのは、薄い透明なプラスチック製のシートと、ポリ容器に入ったワックスだった。

「なんだ？ まずワックスがけか？」

芹沢の仏頂面に、自然と笑顔が戻っていた。

「ちょっと違います。これは、シリコンシートと、速乾性ワックスです。シリコンシートにこのワックスを塗れば、人体に影響がなく、しかもスケートリンクと同じような滑り心地が再現できるんです」

新垣は、ランドセルの洗浄液のタンクを速乾性ワックスに入れ替え、ノズルを専用塗布器に付け替えた。

「ほう、新垣の秘密兵器とは、これだったか」

清掃作業で手慣れたのか、看護師がシートを張り付けると、その後で医師たちが手際よく床面にワックスを塗り付けていった。

「あとは、仕切りを立てれば完成です！ 子どもたちを呼んできます！」

作業は予定通り、二時間ほどで終わった。

何もない殺風景だった受付前の空間が、ささやかなスケートリンクに生まれ変わった。

「なあ、芹沢。楽しかっただろう」

上司に言われて嫌とは言えないが、作業前の芹沢とは、人が違ったように表情が華やいでいた。

「あ、はい。何か、日常の中で、忘れていた感情を思い出した気がしました」

少し照れながら、芹沢は答えた。

しばらくすると、新垣は子どもたち数人を連れてきた。だが、その中に、よつくんやルナちゃんの姿はあったが、加奈の姿はなかった。

「大人たちがみんなで協力して、スケートリンクを作ったからね。今日は思い切り遊ぶよ！ 担当の先生たちも、みんな見てるから、大丈夫！」

子どもたちの病状は、それぞれだった。心臓に重い疾患のある子、骨に異常が見つかった子、加奈と同じ白血病で長期入院している子もいた。病棟の子どもたちは普段、

運動や遊びを制限されている。

この日は、医師のお墨付きで遊べるとあって、小さな男の子と女の子は、ワクワクとソワソワが止まらなかった。新垣の周りにまとわりついて、キャッキヤと騒いでいる。

「ねえ、ホントにスケートなんて、できるの!？」

「真夏にスケートって、ウソでしょ!」

低学年は、スケートリンクを覗き込む勢いで興味を示していたし、高学年の女の子は、ここぞとばかりに、新垣にプライベートの質問をぶつけてきた。

「ねえねえ、新垣さん、彼氏できた？」

「新垣さんて、沖縄出身？」

関係のないことを訪ねて、新垣を茶化していたが、スケート用の靴と、ヘルメットなどを手渡すと、一気にその期待感が頂点に達した。

ところが。

「さあ、これが先生や私たちからのプレゼントよ。名付けて、『わっくワックススケートリンク』!」

新垣がドヤ顔でお披露目すると、逆に子どもたちのテンションは、一気に落ち込んだ。

「え……? これがスケートリンク？」

「床がテカってるだけじゃん」

「想像してたのと、全然違う……」

「氷は? 氷はどこ？」

子どもたちは、純粋にアイススケートリンクを想像していただけに、即席のワックススケートリンクは期待外れだったのだ。

新垣の顔から余裕が消え、表情が引きつった。

「あ、あれ? う、嬉しくない？」

喜んでもらえると思っていただけに、子どもたちの反応は、意外だった。

「だって、これスケートリンクじゃないもん」

「なんか、油でべとべとになりそう……」

がっかり、と言った表情で、ワックススケートリンクをぼんやりと眺めている。

これには、さすがの新垣も、少し動揺した。

「え、えっとね、これは速乾性ワックスと言って、転んでも濡れないし、氷みたいに硬くないから、痛くないのよ。ほら、シートも敷いてあるし」

そう言って聞かせたが、子どもたちには、その声が届かなかった。

新垣は、ツツツと金沢に近寄って、助け舟を求めた。

(せ、先生。どうしましょ。なんか、子どもたちの反応が、イマイチ過ぎて)

(そ、そうだな。というか、これは予想外か?)

(はいっ。はっきり言って、予想外です!)

(お前、得意げに言うなよ……)

二人が途方に暮れていると、後ろから女子の声が出た。

「私、滑ってもいい？」

その少女は、フィギュアの衣装に身を包み、マイシューズを履いて準備万端の日枝加奈だった。

「か、加奈ちゃん。来てくれたの」

「うん。ホントにリンクができてて、びっくりしたよ」

加奈は、颯爽と狭いスケートリンクに入って行った。縦横が七メートルほどで、大きな動きはできない。ほんのお遊び程度だが、加奈は嬉しそうだった。

久しぶりの感触を確かめるように、加奈はグルグルとリンクを周回していた。

「お姉ちゃん、面白そう！」

「ジャンプしてみて！」

よっくんとルナちゃんが言うと、加奈は、ニッコリとほほ笑んで、

「いいよ！」

と答えた。病室にいた時の暗い表情とは、別人のような明るさだった。

加奈は、狭いリンクを工夫して、短い助走でジャンプし、空中で一回転した。

「わあ、凄い！」

「お姉ちゃん、かっこいい〜」

小さなスケートリンクは、子どもたちの歓声であふれた。

「もう一回、やってみるね」

そう言って、加奈はもう一度、今度は一回転半に挑戦してみた。

クルッ、どさっ

「イテテ……。失敗しちゃった」

慌てて、金沢と新垣がリンクの中に入った。

「大丈夫かい？ 大事な体なんだから、あまり無理しないように」

「体を動かしたの、久しぶりだったから。でも、大丈夫です」

加奈は、金沢に付き添われて見学をすることにした。

いつの間にか、子どもたちがリンクの中に入って、加奈を真似て滑り始めていた。

時折、子どもたちは滑って、転んで、痛がって泣いたりしていたが、その顔にはすぐに笑顔が戻っていた。

それを見守る医師や看護師たちも、自然とその様子を見て微笑みがこぼれていた。

金沢の傍らに、芹沢の姿があった。

「久しぶりに、あの子たちの楽しそうな顔を見ました。私は、診察中のあの不安そうな顔しか見たことがなかった。彼らの笑顔を見て、私の気持ちも洗われるようでした」

芹沢は、照れながら言った。

「だな。診察の時には、絶対に見せない笑顔だ。人間という生き物は、心の生き物だ。心が元気ならば、病と闘う力にもなる。その力の源泉は、笑いだよ」

「笑い、ですか。治療に笑いが必要なんて、考えてもみなかったです」

芹沢は、口を真一文字に結んで考え込んだ。

「そして、笑いを得るためには心がキレイでなければならない。建物も人間の心も、使っているうち、過ごしているうちに汚れてくる。その状態が長く続くと、物事を見る目も、自然と曇ってくる」

金沢は細い目をして、リンクで遊ぶ子どもたちを見つめていた。

「……耳が痛いですね」

「そうだ。だから日本人は、掃除を心の修業として日常生活の中に取り入れ、床を磨くと同じように心を磨いてきた。それが、日本のキレイということだ」

「日本の、キレイ……」

いつの間にか、新垣が子どもたちと一緒に、スケートリンクの中で遊んでいた。加奈も、体調が戻ったのか、自分よりも小さい子に滑り方を指導していた。

その笑顔は、いつも見せる笑顔よりもどこか澄んでいて、輝きが違うような気がした。

しばらくして、加奈が新垣と一緒に出てきた。

「新垣さん、先生。素敵なプレゼントをありがとう。私、病気してから全然笑ってないことに、今気づいたの。いま、みんなと笑い合えて、ちょっぴりだけど勇気が出たの。少し怖いけど、手術を受けて、元気になって、またスケート頑張ります！」

加奈に、入院前の明るさが戻っていた。(了)